

海底の墓標タイタニックからワシントンのヴェトナム戦没者慰霊碑。さらにはリベスキンドのホロコースト・メモリアルやユダヤ歴史博物館の計画に至るまで。記憶の抹殺をいかに記憶に留めるか。この倒錯が歴史の本質をなす以上、歴史学はそこから無縁ではありえない。アムステルダムでこの夏開催された国際美術史学会のテーマは「記憶と忘却」。日本でいうならば敗戦後51年目のこの行事に、しかしアジアからの発言は皆無だった。それより数カ月前にパリで開催された小規模なポスト・コロニアルを巡るコロークを別とすれば。そこで鶴飼哲は沖縄戦、そして原爆の犠牲となった朝鮮民族の「現在」を問うていた。

沖縄戦没者メモリアルは献花を禁じている点でワシントンのヴェトナム戦争犠牲軍人慰霊碑とは性質を異にする。軍属にも市民にも解放された壁なす御影石は、しかしすべての犠牲者を記録してはいない。多くの朝鮮出身者の遺族はそこ



連載④  
記憶の忘却と忘却の記憶

# 記念碑のクロノポリティクス

三重大学・フランス文学

稲賀繁美  
Inaga Shigemichi

に親族の名が刻まれるのを拒絶した。犠牲者の数は、ここで数として測定されることそのものを拒否している。死による和解は成就せず、かつて併合された民は、たとえ犠牲者としてであれ、征服国の歴史に組み入れられることを拒否し続ける。犠牲を犠牲として刻印することが、記述の水準での征服行為として禁じられる。「日本美術史」はこの欠落を傷として宿すことでしか成立しえまい。

広島現代美術館正面から、ヘンリー・ムアのアトム・ワークが撤去された顛末。長崎の原爆資料館での展示内容に関する論争と変更の経過。さらには日朝鮮総督府解体に至る記憶の政治学を、その背後にあった対立の構図ともども直視する気風が、なおこの国の言論界には希薄なのではないか。スミソニアン博物館での原爆記録展示をめぐる日本側のさまざまな反応を、きちんと整理して提供することは、博物館学の最低限の倫理ではないのだろうか。